

令和5年度実践研究奨励援助事業実施校 研究主題等一覧

■ グループ・個人研究

※校長・園長名は令和6年度

No.	園名・校名	園長・校長名	代表研究者	研究主題
1	宇都宮市立上河内中央小学校（富屋小学校）	山中 武史	山口 麻美	自分の目の健康を守れる児童の育成
2	宇都宮市立陽東小学校	庄司 和弘	鈴木恵美子 他	特別支援学級の児童がより楽しく生活に必要なスキルを身に付けるために 一知的障害特別支援学級における生活単元学習の計画表の作成とその実践～
3	宇都宮大学共同教育学部附属小学校	近藤 秀人	秋澤 克樹 他	数学的活動の授業動画の蓄積や分析と若手教員に向けての提供コンテンツの作成～数理的に捉え学習問題を見いだす導入場面に焦点を当てて～
4	宇都宮大学共同教育学部附属小学校	近藤 秀人	福田 耕平 他	発信！ICT×保護者参加型生活科授業の創造
5	日光市立小林小学校	瀬楽 治弘	宮崎 直美 他	言語活動を重視した「見方、考え方を広める」英語教育の実践
6	栃木県立小山高等学校	小林 崇宏	田中 正樹	総合的な探究の時間における進路探究プログラムの実践を踏まえて、生徒が抱える個別の進路指導・キャリア教育上の課題に向き合う効果的な指導等について

研究主題　自分の目の健康を守れる児童の育成

学校または園名　宇都宮市立上河内中央小学校（宇都宮市立富屋小学校）

校長または園長名　山中　武史

研究者　職　氏名　養護教諭　山口　麻美

1 研究目的

本校の児童は、視力のB以下の割合が32%と、過去6年間の中で2番目に悪く、6年前と比較してB以下の割合が約15%増加した。また、低学年の視力検査結果も過去6年間の推移でみると、悪化が見て取れる。（6年前13.3%→今年度33.3%）

また、学校や家庭で、タブレットを日常的に使うようになり、今後も子どもの視力の低下が心配される。そこで、目の健康に焦点を当てて、児童や保護者に対し、様々な取り組みをすることで、目の健康への意識強化と自分の目を守るために行動が取れる児童の育成を目指すことを目的とする。

2 研究内容

○令和5年9月「目の健康は自分で守る」をテーマに、全学年20分の保健指導を実施。
○同9月から11月にかけて、委員会児童発信で、目の健康への取り組みを実施。

- ・目の健康レシピコンテスト(家庭・学校)：目の健康に良い栄養素や食材を知らせ、その食材を使ったレシピを募集。
- ・目の健康チャレンジシート(家庭・学校)：保護者と、目の健康のために自分でできることを考え、3日間のチャレンジ。チャレンジの感想を書かせ、保護者からコメントをいただいた。提出シートは委員会児童がまとめ、委員会用掲示板に掲示。

- ・目のいろいろクイズ：委員会児童一人1問、目にまつわるクイズを放送で出題し、回答を昇降口に掲示。

○同9月から、毎月1回全学年で「自分の目を守ろうシート」を実施：目の健康を守るために6項目をチェック。（日本眼科医会資料参考）

○同10月、保健だより・掲示板で目の健康に関する内容を取り上げ。また、目を題材にした本の展示や視力測定器の設置。

○同11月、就学時健康診断にて、保護者へ目の健康について伝達・啓発。

○同12月、学校保健給食委員会を開催。（学

校医・保護者・教職員が参加）

・視力の現状や課題と目の健康に関する取り組みの伝達と、目の健康をテーマにしたディスカッションの実施。

○令和6年1月、1年生及び希望者へ色覚検査の実施と目の大切さの指導。

○同2月、学校保健給食委員会により作成及びPTA広報誌への掲載による保護者への啓発。

3 研究成果

令和5年度の保健重点課題を「目の健康」に絞ったことで、目の健康を意識して生活する児童が増えた。特に、委員会児童発信の企画では、多くの児童の興味関心を引いた。家庭での活動にしたこと、家庭生活においても目に優しい生活を考えることができた。また、「自分の目を守ろうシート」を全学年で月1回実施したこと、具体的な目に優しい生活行動を継続的に振り返り、実践へと結びつけた。さらに、学校保健給食委員会や各種たよりで、学校の取り組みを保護者全体へ知らせたことで、理解や協力を得ることができた。年間を通して、多様な方法で啓発に努めることにより、1月の視力検査の結果、4月と比較して、全ての学年で視力の改善を図ることができた。

4 今後の課題

今年度の視力の結果は改善に転じたが、児童が生涯にわたり自分の目を守れる生活をしていくためには、継続した働きかけが必要である。

望ましい生活習慣の形成には、保護者の協力が必要不可欠である。掲示やたより、学校保健給食委員会等で、学校医と連携し、専門的で確かな情報を発信していくことで、保護者の意識の向上や児童のよりよい生活へのサポートが望めると考える。

また、児童が学校内外で主体的かつ持続的に正しい行動を実践していく力を養うために、さらなる方策を模索する必要がある。

研究主題 特別支援学級の児童が、生活に必要なスキルを楽しく身に付けるために

一知的障害特別支援学級における生活単元学習の計画表の作成とその実践－

学校または園名 宇都宮市立陽東小学校

校長または園長名 庄司 和弘

研究者 職 氏名 教諭：鈴木恵美子・大津規子・小川裕美・清水大翔・神山つかさ

1 研究目的

知的障害特別支援学級、特に拠点校には、特別支援学校での学びが適切であると判断された児童が多く入学する傾向にある。それらの児童は、通常の学級の教科学習を履修することが難しい児童が多く、単に学年を下げた学習ではなく教科・領域を合わせて学習することにより生活に必要なスキルを身に付けることができる「生活単元学習」の必要性が高まってくる。

一方、本市において教員の年齢構成の不均衡や特別支援学級担任が不足している傾向から、「生活単元学習」の意義や実施方法について知る教員が少なくなってきた。そこで生活単元学習の計画表や教科関連表を作成することにより、多くの特別支援学級担任に「生活単元学習」の在り方について知ってもらい、授業において実践しやすくしたいと考えた。そのためには、計画表や教科関連表を作成し、授業実践に役立て、児童が楽しく生活に必要なスキルを身に付けられるようにしたいと考えた。

2 研究内容

(1) 計画表・教科関連表について

1年を通した生活単元学習の題材について考え、それぞれの計画表と教科関連表を作成した。

計画表には、その単元の大きな目標を立てたほかに、どの単元でも「計画・準備」「実践」「ふりかえり」という大きな流れの中に考えられる学習活動を設定し、それぞれに簡単な目標を設定した。（別紙資料1）

教科関連表は、計画表の中の学習活動を入れ、その活動が他のどの教科に関連するかを○で示す表に表した。（別紙資料2）

(2) 授業実践

作成した計画表に基づき、「やさいを育てて食べよう」という授業実践をした。

春に自分で選んだ野菜の苗を植え、野菜の手入れをしながら観察や収穫を行った。その野菜を使って調理を行い、試食した。自分で育てた野菜を自分で調理して食べる、という経験は、児童の活動意欲につながり、みんながおいしく食べることができた。また、調理は、生活するために大切なスキルであり、繰り返し様々な活動に取り入れていくとともに、毎年していくよと思わ

れる活動である。



写真1 野菜を切る様子



写真2 野菜を炒める様子

3 研究成果

計画表の作成をしたことにより、大きな単元の流れが分かるようになり、教師が見通しをもって授業を進められるようになった。

また、「計画・準備」「実践」「ふりかえり」という流れを統一したことにより、教師だけでなく児童も学習の見通しをもって活動に取り組むことができた。

計画表においては、の学習活動の中に簡単な目標を立てたことにより、活動のねらいがはつきりしたことも成果である。

計画表に基づいた授業実践では、児童が自ら取り組んだり、楽しそうに活動したりする姿が見られた。

教科関連表では、関連する教科が明確になり、生活単元学習だけでは理解できない部分を教科で補ったり、一部の活動を教科の時間に行ったりすることができた。

4 今後の課題

教科の内容だけを学ぶ授業は、教える教師も教わる児童も単調になってしまいがちである。その中で生活単元学習のように長い期間をかけたり、行事に向かって準備をしたりする学習を取り入れることは、児童の学ぶ意欲につながると考える。

日々の忙しい授業の中で、毎年新しい単元を考え計画していくことは難しいことではあるが、今回作成した計画表や教科関連表をもとにアレンジし自校化し、先生方の負担軽減を図りながら児童が楽しく活動できる「生活単元学習」の授業を行えれば、児童が楽しく調理などのスキルを身に付けることができると思われる。

市内の多くの特別支援学級担任に「生活単元学習」について計画表や教科関連表を活用していただく方法については、良い方法を考えいく必要がある。

研究主題 数学的活動の授業動画の蓄積や分析と若手教員に向けての提供コンテンツの作成
～数理的に捉え学習問題を見いだす導入場面に焦点を当てて～

学校または園名 宇都宮大学共同教育学部附属小学校

校長または園長名 近藤 秀人

研究者 職 氏名 教諭 秋澤克樹・主幹教諭 櫻井昭洋

1 研究目的

日常の授業の導入場面を分析し、有効と考えられることについては、動画集としてコンテンツを作成し、広く若手の先生に役立てられるようする。また、本校の公開研究発表会や授業力アップセミナー、授業提供などにおいて情報提供し活用できるようにする。

2 研究内容

本校は教科担任制のため、1年間に2学年の算数を担当している。そのため、実施可能な範囲で、2年生、5年生、6年生の授業の導入場面に絞り、授業の動画を撮影し、コンテンツを蓄積した。また、本校では、公開研究発表会、校内研修会などの授業実践も行っているため、その動画の導入についてもコンテンツ化することとした。具体的には、以下の通りである。

2年生 たし算、水のかさ

5年生 2つの量の変わり方、偶数と奇数等

6年生 文字を使った式、円の面積、比等

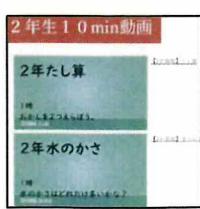
導入場面に焦点を当てるため、授業の開始から10分程度までを基本的にはノーカットと



した。また、ポイント

となる場面には、字

幕を入れて（左図）動



画を見るだけで完結できるよ
うに編集を行った。編集を行つ
た動画については、オンライン
上で閲覧できるよう一覧と
して（左図）整理している。

3 研究成果

導入を分析し、明らかになったこととしては子供の実態に応じて問題場面の工夫をすることで、数学的活動として問題を見いだしたり、数学的に考えたりしようとする姿が見られたことである。また、問題場面が自分事となり、より数学的に問題解決しようとすることができるようになるということである。また、本校の授業力アップセミナー、小教研等における講話、授業提供などにおいて情報を提供し、より広い場面で活用できるようにした。また、動画が短いため、視聴する際も短時間で完結できる点も成果と考えられる。若い先生はもちろん、様々な先生方などにとって扱いやすいコンテンツとなったと考えている。

4 今後の課題

今回は導入に焦点をあてたが、自力解決後、児童同士の意見を話し合い、まとめる際に、時間が足りず、要点がまとまらないということがあった。数学的活動は、問題を見いだすだけではなく、解決過程を振り返り、結果の意味付けなどの活動も重要だ。どのように数学的活動を充実させるかを考える必要がある。

動画集となるため、あくまで個人研究の一部として参考になればと考えている。転用などがされないよう、そのアナウンスも必須である。モラルをもって参考にしていただきたい。

<https://sway.cloud.microsoft/HZI1SiBT2Trkuo6L>

発信！ICT×保護者参加型生活科授業の創造

宇都宮大学共同教育学部附属小学校

校長 近藤秀人

教諭 福田耕平 大塚純平

1 研究目的

本研究の目的は、生活科授業における子どもたちの気付きの質を高めることとともに、県内教職員に向けた生活科授業づくりについての研修の場を設け、教職員の資質・能力の向上に寄与したいと考え行った。

2 研究内容

①ICTの活用事例について

直接体験を重視する生活科において、タブレット端末などを効果的に用いて、子どもの気付きの質を高めていく。

②家庭との連携

保護者が直接授業に参加したり、教材を作つてもらうことで、子どもの気付きを促したり、

③セミナーの開催

①②の授業実践を中心とした授業づくりセミナーを開催し、生活科の授業づくりに関する情報を提供したり、一緒に考えたりする場を設けていく。

3 研究成果



2年生の町探検で見つけたお気に入りをタブレット端末を用いて伝え合いを行った。

写真を見ながら伝え合うことで、互いの気付きを関連付けたり、新たなお気に入りを見つけたりすることができた。また、保護者作成の町探検クイズを授業の冒頭で行い、町探検に行きたいという思いを高めることができた。

すごうで
ナンバー1

いつもたくさんの
かんじやさんでい
っぱいだよ。

(保護者クイズの様子)

おもいっきりカーニバルという遊びを創り出す授業では、保護者から見た子どもの頑張りをQRコードを介して記入してもらった。自己の成長に気付くなど、達成感を得ることができた。



(保護者からのフィードバック)

フル	工夫や面白さ、達成感のコメントを多く述べください。
おきかなのはりかわらしきんあつてたのしかったです	
お魚を沢山作ってたり、音楽も豫報があってよかったです	
さかななりやささん、てんわんさんのがんきがよくて、たのしかった	
お魚を沢山作ってたり、音楽も豫報があってよかったです	
さかななりやささん、てんわんさんはかわいいとおもいました	
じしゃくやタリックなど、つりあおそれそれの魚がらがってくらうがすばらしかったです。大きなもののかつりあげてみんながうれしがいでいて楽しんでました	
つりあいでもあって、とてもすむーすにさなこりを楽しむことができました。おみせやさんのがようふくもすできました	
ちーむできょうりょくするくふうや。だからおじいちゃんがあるので、ぼうけんのようにならしました	
つりあおのはりぬがんがちゃんととねつかかるよりにつくってあってすてきでした	
じょくうさんもかわらしきんあつてたのしかったです	
つりざわや。おきかなにくうがあってたのしくつらがきました	

セミナーでは、計100名以上の教員に参加してもらった。「この手法を参考にしたい。」というような声や参加者から実践を紹介してもらったりするなど、双方向でのやり取りが生まれ、参加者にとって生活科授業を考える機会となった。

4 今後の課題

ICTや保護者参加型の授業により、子どもの思いや気付きの質の高まりが見られた。一方で、これからも直接体験を重視することや保護者と一緒に子どもの成長を支えていく必要がある。また、継続してセミナーを開催し、教職員の資質・能力の向上に寄与していきたい。



研究主題 「言語活動を重視した「見方、考え方を広める」英語教育の実践」

日光市立小林小学校

校長 瀬楽 治弘

研究者 宮崎直美 石田汐音 笹沼亜美 星野佑太 レアマン・アフシン

1 研究目的

英語の授業の充実や、国際理解についての教育環境を整え、外国語による【聞く】【読む】
【話す】【書く】の言語活動を通して、「見方考え方を」広める。

2 研究内容

① 授業の充実

・毎時の授業において（資料1）のように授業の流れを見える化して、学習活動を児童本人が理解し自分から学習を進められるようにする。

【聞く】 “Let's watch and think”
【読む】 “Rule of the week”
【話す】 “Small talk”
・パフォーマンステスト実施（月1回）
【書く】 “English notebook” 資料1

② 英語に親しむ環境作り

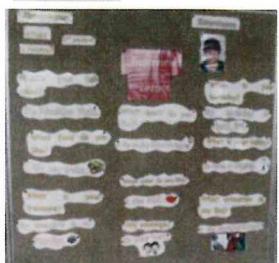
【コミュニケーション】

・先生に英語でインタビュー（資料2）

【国際理解】

・様々な国の行事等について、英語の教室の壁面掲示（資料3）

資料 2



資料 3



③ I C Tを活用した外国の小学生との交流

・パキスタンの小学生と話す授業の計画
・ビデオレター交流
・リモート授業5、6年生
(パキスタンの小学生と英語を使ったコミュニケーション)



3 研究成果

・授業の流れを見える化することで授業の目的に沿って、何を学び、どんな力を磨いていくかを児童自身がイメージすることができ意欲的な取組が見られた。
・“English notebook”的活用により、ジョリーフォニックスで培った音声の知識で単語を書くことに応用し、知識の蓄積をすることができた。
・母国語と英語を使い分ける同い年の外国の小学生との交流により、英語を未来の社会につなげる手段として認識することができ、更なる学習意欲へのつなげることができた。

4 今後の課題

・今回5、6年生の外国語の授業を中心に、コミュニケーション力の育成を図った。しかし、単語や発音など語学の基礎となる学習は、低中学年の授業が重要だと感じた。そこで、低中学年の段階に機会を捉えて英語に親しむ活動を増やすようとする。
・コミュニケーション活動では、対話より発表を聞き合う活動になってしまったため、英語で会話ができる内容を考え児童の自発的な会話を促す活動の積み重ねるようにしていきたい。

研究主題 総合的な探究の時間における進路探究プログラムの実践を踏まえ、生徒が抱える個別の進路指導・キャリア教育上の課題に向き合う効果的な指導等について

学校名 栃木県立小山高等学校

校長名 小林 崇宏

研究者 職・氏名 教諭・田中 正樹

1 研究目的

総合的な探究の時間を活用して、学問をテーマに2年生対象に大学と連携した小山高校進路探究プログラムを実施した成果を踏まえ生徒に『将来なりたい自分』を考えさせ、3年生時に、ICT活用したポートフォーリオ等活用した効果的な進路指導・面談等の実践方法・内容等を研究・開発する。

2 研究内容

I 小山高校進路探究プログラムの実践

- ① 編成した学問グループ毎に、大学指導先生と希望生徒とで探究テーマ・『問い合わせ』について、本校担当教員の指導の下、大学担当教員と連携して、探究学習を行う。
- ② 各グループ毎に大学担当教員の研究室に伺い、研究ゼミに参加して、探究学習の成果をプレゼン、大学担当教員から指導・助言等頂く等、研究室インターーンを実施する。
- ③ 学校に戻り、探究した学びの成果について、整理してまとめ、プレゼンを作成する。
- ④ 作成したプレゼンを全体成果発表会で、探究プログラムの学びの成果を共有する。
- ⑤ 研究紀要の作成をスタートさせる。
- ⑥ 進路探究プログラムの成果より『将来なりたい自分』を考えさせた。また、それを踏まえて『学びの設計図』作成準備を行った。



II 小山高校進路探究プログラムの成果

- ① 《4月～6月》3年生に『学びの設計図』を作成させる。進路面談を実施。
- ② 《6月下旬》進路面談を踏まえて個々にポートフォーリオ（志望校検討個人帳票）を作成、それを志望校検討会の資料とした。
- ③ 《7月》生徒に個人帳票を配布、して志望校検討の参考にさせ、また、保護者面談時に活用した。



3 研究成果

【小山高校進路探究プログラム】の成果

- ◆「なりたい自分」を主体的に考えることができた [92%]
- ◆学問について理解と意識が高まった [96%]
- ◆ポートフォーリオ活用等により、生徒面談及び保護者面談時に、効果的な進路面談が実施できた。
- ◆研究集録の作成



4 今後の課題

『小山高校進路探究プログラム』は、これまでの反省点を踏まえて、課題を解決しながら、より一層質の高い探究学習プログラムに改善を図るとともに、『進路面談』については、ICT等を有効活用して、必要な情報を分かりやすく伝えるポートフォーリオに改善することにより、より一層適切な進路面談が効果的に実施できるようにすることが、今後の課題である。